

SECOND SIGHT

視力のない世界から 帰ってきた



ロバート・V・ハイン 山田和子 [訳]



晶文社

著者について

ロバート・V・ハイン

一九二一年生まれ。アメリカの歴史学者。青年期からリウマチ様関節炎によるブドウ膜炎をわずらう。低下しつづける視力とたたかいながら研究に専念。イエール大学で歴史学の博士号を取得。現在、カリフォルニア大学名誉教授。『アメリカ西部の歴史』『カリフォルニアのユートピア・コロニー』など著書多数。

訳者について

山田和子（やまだ・かずこ）

一九五一年生まれ。慶応義塾大学文学部独文科中退。翻訳家。編集、評論の分野で、またサイエンス・ライターとしても活躍している。主な訳書にジョージ・ルリグウィン『夜の言葉』（共訳、岩波書店）などがある。

視力しりょくのない世界せかいから帰かえってきた

一九九七年九月二五日発行

著者 ロバート・V・ハイン

訳者 山田和子

発行者 株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二一―一二一

電話東京三二五局四五〇一（代表）・四五〇三（編集）

振替〇〇一六〇一八六二七九九

壮光舎印刷・牧製本

Printed in Japan

〔本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（〇三―三四〇―一二三八二）までご連絡ください。〕

（検印廃止）落丁・乱丁本はお取替えいたします。

SECOND SIGHT

視力のない世界から 帰ってきた

工業学院図書館
蔵書章



ロバート・V・ハイン 山田和子 [訳]



晶文社

晶文社 定価 [本体2300円+税]

ISBN4-7949-6323-8

C0047 ¥2300E

視力のない世界から 帰ってきた

ロバート・V・ハイン 山田和子[訳]



晶文社

SECOND SIGHT

by Robert V. Hine

© 1993 by Robert V. Hine

Published in Japan, 1997

by Shobun-sha Publisher, Tokyo

Japanese translation published by arrangement with
The University of California Press through
The English Agency (Japan) Ltd.

視力のない世界から帰ってきた 目次

1 失明予告

なぜ私だけが……

19

黒い眼鏡の大学生

22

アメリカで一番高い町、レッドヴィルへ

26

両親にもらった希望

32

高地療養に見切りをつける

35

妻との二人三脚がはじまった

36

回復の見こみは何パーセント？

40

2 「やりたいこと」と「できないこと」

ブレイユ点字との出会い

45

人海戦術で資料探し

50

こえられない壁は迂回すればいい

55

新しい研究生活 58

「盲目」は歴史学者の致命傷か 61

最高の友人、音声コンピュータ 67

娘との葛藤 71

できることはまだまだある 75

想像力を磨く楽しみ 80

3 「白い杖」の世界で

やっぱ杖を持とう 84

ブドウ膜炎と白内障 89

教え子ゲリーの挑戦 93

私は決して孤独ではない 97

障害とユーモア 103

4 映画とイマジネーション

まぶたの裏の映像 109

こんな映画の見かたもある 115

視覚を失った作家たち

117

盲目の画家、アンドリュウ・ポトク

120

秩序とカオスの間で

125

5 そして手術は成功した

右目に異変が……

129

手術の間に見えたもの

131

目から覆いが取れた瞬間

137

月光の感動

141

6 すばらしい再発見

運転だって夢ではない！

145

「人間の顔」のふしぎ

152

夢にも色が戻ってきた

155

親愛なるドクター・キリーン

158

7 過去への旅、未来の夢

想像が現実が変わるとき

161

ひとりひとりの顔が見える

164

「自分」との再会

171

咲き誇る花、セルリアンブルーの海……

176

8 チャンス、ふたたび

左目にも望みをたくして

185

二度目の手術へ

190

隻眼で生きる決意

200

生まれ変わった自分、変わらなかった自分

202

9 ふたつの世界を生きて

「盲人の国」というユートピア

210

持てる者 vs. 持たざる者

215

障害者を怖れる心理

219

とぎすまされていく感覚 225

「見えない世界」は別世界か 229

自分にずっと問いつづけたこと

233

訳者あとがき 238

参考文献 v

索引 i

家族に

そして、一時間半で

家族を私のもとに連れ戻してくれた女性
ジーン・L・キリーン医師に

ブックデザイン

藤村 誠



ハイン夫妻。手術の翌年に撮影したもの

はじめに

ひとつの状態から別の状態に移行すると、人間はときとして、精神的な傷を受けると同時に、様々なことを学ぶものである。とりわけ、このふたつの状態が視力のある状態とない状態であったなら、つまり、目の見える者が盲目になったり、見えなかった者が視力を回復したりという場合に、この傾向は顕著になる。

十五年間、目の見えない世界で過ごしてきて、ふたたび視力のある世界に戻れるとわかったとき、私にとって、この精神的な傷は実に多くを教えてくれる源になった。そこで、私は自分の反応を詳細に日誌に記録しはじめた。最初は点字で書いていたが、やがて目に映る日誌のページがはつきりしていくとともに、記録は手書きになっていった。

さらに、長い年月の間に鈍化していた目のごくごくゆっくりと印刷された文字に慣れていくと、

私は盲目の著者が書いた本を読むようになった。これは一種やむにやまれぬ思いにかられてのことで、視力が回復して読書ができるようになったのを楽しむだけのものではなかった。自分の身に起こったこと、自分が何を失い、何を取り戻したのかを理解する必要があった。ほかの人々の体験を知れば、私自身の内面で何が進行しているかがわかるかもしれない。

そして、こうした私の欲求にとって最も役に立ったのは、ホメロスでもサムソンでもヘレン・ケラーでもジョン・ミルトンでもなく、明るくも美しくもない錯綜した世界に立ち向かった現代作家たちだった。

たとえばジョン・ハル。

私と同じ大学教授であるハルは、みずからの体験の意味するものを一種の神託としてとらえていた。ハルにとって盲目とは「身体全体で見ることであり、身体全体に一個の知覚器官の代用をさせることだった。これは「恐るべき天賦の能力」である。ハルは闇を光に変える預言者イザヤではなく、あたかも墮天使たちの支配する闇の領域、「失樂園」で神の姿を探し求めるかのように、「自分の光がどのように使い尽くされていくかを考察」する。

神秘主義的傾向の強いフランス人作家、ジャック・リュセイラン。

リュセイランの出发点は、フランスのレジスタンス活動とドイツの強制収容所ブーヘンヴァルトの恐怖の体験である。リュセイランにとって盲目は闇ではない。闇は恐れや怒りを感じたとき、病んでいるときにだけ現われるものだ。リュセイランは光あふれる世界に生きている。「目覚め